

Title	物価騰貴の 原因 の意義
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.9 (1919. 9) ,p.1216(114)- 1229(127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190901-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

身の意見を發表せる場合、自家一個の意味にては其説は殆んど正當なり。形式上新説たるもあり、説を改めしものは更に多し。然れ共舊説に對し斬然相反せる價值新説を發見せりと稱すべき程進歩をなせしものと思はれず。又其發展擴張上著しく舊説を破れりと稱すべきものもなし。

以上は相異なる物の相對的交換價值を支配する原因に就てのみリカルドの第一章を論ぜしなり。これ次で來る思想に及ぼせし影響主として此點に存すればなり。然れ共これと勞働の價格が、如何の程度迄貨幣購買力を量る適好の標準なりやの論争に關す。其關係は歴史的に興味ある事なり。仍て此に關してはホランダ教授が千九百四年季刊經濟雜誌に寄せられし好論文ある事を一言するに止めん。

し、今日迄(執筆當時迄)斷乎たる處置を採ることを避けてゐた。通貨收縮論者も通貨の人爲的收縮に依りて誘致せらるゝ諸物價の低落が企業熱を冷却し、景氣に多少の影響を興ふるに至る可きものであることを絶體に否定しては居らぬ。否な彼等の或者は寧ろ此影響を今日大に歡迎す可きであると論じてゐる。如何となれば、物價奔騰の爲めに、平時ならば企圖せられない幾多の製造業が今日濫興せられ、且つ計畫せられてゐるが、物價調節は此等の不自然なる事業を淘汰するに至る可きが故に、産業が一層健實なる基礎の上に置かるゝことに爲るからであると云ふのである。

通貨を無理に收縮せしむれば、物價は勿論低落するに違ひない。又、此際物價が低落すれば、或る産業は打撃を蒙り、夫れが爲め一般經濟界が一時不景氣に襲はるゝに至る可きことも逆睹

物價騰貴の『原因』の意義

高城 仙次 郎

一 物價騰貴の原因に關する論争

我國の物價は休戦後一時低落の趨勢を示したのであるが、五月より亦々騰勢に轉じ、最近の水準は休戦直前に比して更に一割四五分の高率を呈するに至つたので、民間の論客は益々物價調節の急務を絶叫してゐる。彼等は物價騰貴の原因を以て通貨の膨脹に在りと爲し、其騰貴の趨勢を頓挫せしむるのみならず、進んで諸物價、殊に生活必需品の價格を人爲的に低落せしむる爲めに、通貨の收縮を斷行せねばならぬと切論してゐるのである。然るに、政府は通貨の收縮は不景氣、失業、恐慌等を招徠するものであるが故に、之を濫りに實行するは不得策であると稱

し難くは無い。さりながら、此一時的な不景氣が果して、通貨收縮論者の信するが如く、結局一般國民の利益を増進するの結果を呈するに至るか否やは疑問とせざるを得ない。換言すれば、現内閣の微温的政策と通貨收縮論者の唱道する急激的物價調節との孰れが結局國民利福を増進する上に於て最も効果あるか、と云ふことは容易に解決し難い問題である。實は双方共に相當の理窟がある。孰れの見地に立つても、尤もらしき議論を並べ立つることは容易である。此事は物價調節の可否のみに關する現象では無く、實は總ての政策共通の事實であると云ふを妨げ無い。『可否』、『良否』、『當不當』と云ふことは理論のみに依りて推斷し得るものではない。通貨が膨脹して物價が暴騰した爲めに細民が困窮して居るのであるから、細民を生活難より救ひ出すには通貨を收縮して物價を低落せしむれば良い

と云ふは至極簡單明瞭の議論の様であるが、此問題は斯くの如き單純なるものでは無いのである。然し此物價調節の可否に就きては予は既に再三他の機會に於て愚見を開陳してゐるから、茲には詳述するを避け、本論に於ては物價騰貴の原因に關して世人の懷きて居ると思はれる誤解を指摘し度いと思ふ。

政府當局者と民間學者並に操觚者との間には單に政策論としての物價調節の可否に關して意見の扞格があるのみならず、物價の騰貴を誘致せる原因に就きても大に見解を異にしてゐる。即ち、民間論客の大多數は、讀者の知れるが如く、物價の暴騰は通貨の大膨脹に依りて醸成せられたものであると論じてゐるに反し、政府當局者は通貨の膨脹は物價騰貴の原因では無くして、寧ろ其の結果である、換言すれば、物價が騰貴したから、通貨膨脹の必要を生じたのである

ると云ふてゐる。斯くの如く、今日我國に於ては物價暴騰の原因に關しては少くとも二個の全然異なる見解が行はれてゐるのであるが、此兩說の中果して孰れが正鵠を得た意見であるか高橋大藏大臣は曾て通貨の數量は物價の高低とは殆んど何等の關係が無いと云ふ極端なる意見を持つて居つた様であるが、先月上旬同大臣が公表した物價調節に關する意見書に據れば、高橋男爵は曩日の見解を捨て、物價の高低と通貨の數量との間には密接なる關係の存することを認むるに至つたと看做し得るのである。而かも藏相は尙ほ通貨が膨脹した爲めに物價が暴騰したのであると云ふ通説に服せずして、我國に於て通貨が膨脹したのは海外貿易及び海運業が一大發展を遂げた爲めに外ならずと論じて、暗に通貨の膨脹が物價の暴騰を誘致したのでは無く、物價の騰貴が、少くとも經濟界の好景氣が、

通貨の膨脹を促したのであるとの見解を今尙ほ懷いて居らるゝことを示してゐる。

物價騰貴の原因に關して意見の衝突を見るは我國丈けでは無い。米國に於ても諸物價が開戦後著しく騰貴した爲めに、經濟學者及び操觚者間には通貨收縮論が盛んであるが、先月上旬同國元老院は準備銀行局に向つて通貨收縮の可否に關する意見を徴した處が、同局は通貨の膨脹は國民經濟の膨脹に基くものであつて、物價騰貴の原因と爲つて居らぬから通貨を收縮するの必要なしと回答したとのことである。此米國準備銀行局の意見は我大藏大臣の見解と符節を合するが如くであつて高橋藏相は定めし此意見書を見て空谷に響音を聞くの感を懷いたであらう而かも、物價騰貴の原因に關して論争を生じたのは今回が始めでは無い。遠き以前の事例に溯らずとも、千八百九十六年以降に於て物價が

世界的に漸騰したときに、所謂貨幣數量論者は金産額の増進に基く通貨の膨脹を以て物價騰貴の原因と看做したのであるが、反對論者は物價の騰落は貨物の需用供給の關係に依りて發生する現象であつて、通貨の膨脹は物價騰貴の結果であつて原因では無いと論じた。何故に物價が騰貴したときには、通貨が膨脹するかと云ふに或る貨物の價格が假りに従前の二倍に昂騰すれば其貨物を取引する者は以前の二倍に相當する通貨を要するが故に、銀行に對して以前の倍額の融通を仰ぐからであると云ふのである。

讀者は此の兩說中孰れを是とし孰れを非とせらるゝか。通貨が先づ膨脹して物價が騰貴するのであるか、或は又物價が先づ騰貴して然る後通貨が膨脹するのであるか。予の見解に依れば兩說共に誤つては居らぬが不完全なる說である。兩學說の主張者が各自說の不完全なるを悟

らずして互に相譲らず論争してゐるのは物價騰落の順序に關する綿密なる研究を怠つた爲めに外ならぬと思ふ。是れ予が本論に於て聊か物價騰貴の眞因に關する卑説を略述せんと欲する所以である。物價の調節を論ずるには先づ以て物價騰落の原因に明かにせねばならぬ。従つて以下論述する所が多少にても物價調節論者の參考に爲らば予の本懐是に過ぐるものは無い。

二 物價騰貴の順序

物價騰貴の根本的原因としては戦争、流行、人氣、投機業者の賣惜又は買占等其他種々の事情を擧ぐることを得るであらうが、物價の騰貴は如何なる場合に在りても必ず貨物の需用の膨脹又は其の供給の減退、若しくは此兩者を通じて行はるゝものである。賣惜又は買占と云ふも需用供給を離れて物價に影響を及ぼすことは絶體に無い。如何となれば、賣惜は供給の減退を意

味し、買占は需用の膨脹と爲つて現はるゝものであるからである。

今假りに或る種の貨物に對する需用が或る原因の爲めに急激に増加したとせよ。例へば、戦争が始まりて軍需品の需用が激増せりと假定せよ。さすれば、軍需品の市價は勿論騰貴する。軍需品の市價が騰貴せば、且つ戦争が永引き軍需品の需用が益々増加すると思惟せらるれば、軍需品の製造業が盛んと爲るに違ひ無い。然し總ての軍需品製造業者は事業の擴張に要する資金を充分に所有して居るとは想像するを得ない。其中の或者は必ずや銀行に事業資金の融通を仰がねばならぬ。而かも銀行に資金の融通を仰ぐ者があれば、銀行の貸出が増加し、銀行の貸出が増加すれば、兌換券が増發せられ、通貨が結局膨脹することに爲る。斯くの如くして貸出されたる資金は軍需品製造業者に依りて製造

工場の敷地の代金、製造工場の建築費、機械原料燃料の代金、職工の賃銀等として費消せられ、其の結果として地價、建築材料、機械、原料、燃料等の市價並に賃銀が多少騰貴するに至るのである。而して此等の貨物の市價が騰貴すれば其の供給者の利潤が増加し、其關係企業が盛んと爲り、従つて其方面に於ける資金の需用膨脹し、更に通貨の膨脹を促進することに爲る。又、企業家の利潤の増加と賃銀の騰貴は企業家及び労働者の購買力を増進する結果として、日用品並に奢侈品に對する此等の者の需用自ら膨脹し、其の市價の騰貴を誘致するの結果を呈するものであつて、此影響は漸次有ゆる事業に及ぼされ、一般的に物價を騰貴せしむるに至るのであるが、此一般的物價騰貴は更に一般的に企業家の隆盛を來たし、企業家の隆盛は益々銀行貸出の増加を醸し、銀行貸出の増加は通貨の膨脹を齎

すに至るものである。而かも通貨が斯く膨脹するは企業家が銀行より従前よりも多額の資金の融通を求めたる結果であつて、企業家が銀行より資金の融通を求むるは其資金を以て貨物の代金又は労働者の賃銀の支拂に充つる爲めであるが故に、貨物の需要は自ら増加し、其の市價が更に騰貴するに至るのは論を俟たずして明かである。

斯くの如く、或種貨物の需用の増加は其市價の騰貴を誘致し、物價の騰貴は企業家の勃興を促がし、企業家の勃興は銀行貸出の増加を來たし、銀行貸出の増加は通貨の膨脹と爲つて現はれ、通貨の膨脹は更に物價の騰貴を醸生するものであるが、最初に或種貨物の需用を増加せしむる根本原因が前述の如く必ずしも當該國に於ける戦争のみでなきは喋々するを要せざる所である。

現に我國に於て最初物價を騰貴せしめた原因は輸出の増加に外ならぬ。此外、英米等の如き其領土内に金鑛のある國に在りては金産額の増加が物價騰貴の根本原因と爲ることがある。世界各國の物價變動史に之を徴するに、物價騰貴の趨勢を馴致せる最初の主なる根本原因は實に戦争と金鑛の發見又は採金術の發達に基く金産額の増加とに外ならぬと思はれる。中立國の物價が交戦國に對する貨物供給の激増の爲め騰貴する場合には、貨物輸出の膨脹を以て其の原因と看做す可きは勿論當然のことではあるが、交戦國に於ける貨物需用の増進は戦争に依りて誘致せられたる現象に外ならぬが故に、中立國に於ける物價騰貴も亦根本的に論ずれば戦争の結果であると思へないでも無い。

以上論述せる所は、解説を單純ならしむる爲めに、貨物の供給に何等異動無かりしものと假

定せるものであるが、斯くの如く問題を簡單に爲しても、尙ほ物價騰貴が頗る複雑なる現象であることが之に依りても明かであらう。然らば吾人は何を以て物價騰貴の原因と看做す可きであるか。通貨の膨脹が物價騰貴を誘致するのであるか、將た又物價騰貴が通貨の膨脹を醸生すると看做す可きであるか。吾人は此問題の解決を次項に於て試みやうと思ふ。

三 物價騰貴の眞因

多少の例外はあらうが、物價は前述の如く大體次の順序にて騰貴するものである。

- 一、或種の貨物に對する需用膨脹する。
- (戦争の場合には軍需品。金産額増加の場合には金鑛業者及び鑛山夫の購入する貨物。
- 金鑛業者が金の地金を以て貨物の購買に利用せず、之を銀行に預入せる場合にも、或種の貨物に對する需用が増加する。如何と

なれば、銀行は利子を低下して貸出の増加を圖り、銀行より融通を受けたる企業家は其資金の大部分をば貨物の購入に費消するからである。

- 二、其貨物の市價騰貴する。
- 三、通貨が膨脹する。
- 四、他の貨物の市價も騰貴する。
- 五、通貨が更に膨脹する。
- 六、殆んど有ゆる貨物の市價が昂騰する。
- 七、通貨が更に一層膨脹する。
- 八、物價が更に騰貴する。

斯く如く、物價が騰貴すれば、通貨が膨脹し、通貨が膨脹せば、物價が更に騰貴し、此の循環は幾度が繰返へさるゝものであつて、通貨の膨脹と物價の騰貴とは互に因たり果たるの關係を有してゐる。従つて、其の孰れをも原因と看做し、又結果と看做し得るものである。然るに、

所謂貨幣數量論者は通貨の膨脹のみを以て物價騰貴の原因なりと説き、需用供給論者は物價騰貴を以て通貨膨脹の原因と看做してゐるのであるが、互に楯の一面のみを見た議論であると云はざるを得ない。西洋に『鶏が先きに生れたのか卵が先きに生れたのであるか』と云ふ謎があるが、物價の騰貴と通貨の膨脹との關係に就き論争するは恰かも此西洋の謎の解答に就きて争ふに類してゐる。鶏が先き生れたか卵が先きに生れたかと云ふことは一般的に論ずれば解決し難き問題であるが、特定の鶏及び特定の卵に就きて之を觀れば、明々白々の事實であつて、殆んど問題とするの價値が無い。即ち、Aの鶏はBの卵より生れ、Bの卵はCの鶏、Cの鶏はDの卵より生れたものである。従つて、AとBとに就きて云へば、Bが先きに生れ、BとCとに就きて論ずれば、Cが先きで、Cの鶏とDの卵

に就きて之を觀れば、Dの卵が先きに生れたものである。之と同じく、或る月の下旬に於ける物價騰貴は中旬に於ける通貨膨脹の結果であつて、中旬に於ける通貨の膨脹は上旬の物價騰貴の結果で、上旬の物價騰貴の原因は前月下旬に於ける通貨膨脹であつて、其通貨膨脹の原因は更に中旬の物價騰貴に外ならぬと云ひ得る。物價騰貴の原因を説明する場合には、此順序に依りて行はなければならぬのであつて、通説の如く一般的に且つ抽象的に物價騰貴の原因は通貨の膨脹に在りとか、或は又通貨の膨脹は物價騰貴の原因では無く結果であると論ずるは物價對通貨の關係を剛明する所以では無い。

然らば、貨幣數量論者並に其反對論者が何故に一見水炭相容れざるが如き二個の異なる學說を固持するに至つたのであらうか。由來學者の議論は一元論に傾き易きものであつて、單純

なる一個の原因に依りて總ての現象を説明し去らんとする僻がある。遺傳學に於てダーウインが動物の進化をば器官使用の有無に依りて説明せんとし、ソイズマンが先天的特質の遺傳に依りて説明せんと試み、又經濟學に於て一派の學者が利子の高低は資本の生産力に依りて定まるものであると論ずるに反し、他の學者が價值時差を以て利子の高低を定むる原因と看做せるが如きは其の類例である。吾人の研究問題に就きて之を觀るに、物價の騰貴せる際には、殆んど常に通貨が膨脹してゐるのみならず、通貨の膨脹は殆んど必然的に物價の騰貴を促がすものであるが故に、貨幣論者は總ての場合に於ける物價騰貴をば通貨の膨脹に依りて誘導せられたる現象と看做すに至つたのである。又、反對論者は物價の騰貴は貨物の需用の膨脹か又は供給の減退、若しくは此兩者を通じて常に行はるゝも

のなることを觀察して、需用供給説を唱へてゐるのである。此兩説共に經濟現象に對する不完全なる觀察に基きてゐるものであることは前述の如くである。

四 我國の實例

以上論述したる所を歐洲戰亂勃發以後に於ける我國の物價騰貴に當嵌めて考へて觀るに、最初染料、藥品、鐵類、洋紙、バルブ、硝子等の輸入が杜絶した爲めに、此等の貨物の市價は暴騰したが、一方生絲、米等が暴落した結果として、前者の影響が後者の影響に依りて相殺され、結局一般物價は寧ろ低落し、通貨は膨脹しなかつたのであるが、其の後軍需品の註文が歐洲諸國より殺到するのみならず、對歐貿易般賑の爲め景氣付きたる米國に對する輸出が激増したる結果として、我國に於ける輸出品の市價頗る昂騰し、企業熱盛んと爲り、通貨の膨脹を來たし

たのであるが、此通貨の膨脹は更に諸物價を一般に騰貴せしむるに至つた。然らば、通貨は如何にして膨脹したかと云ふに、輸出業者の振出したる爲替手形をば正金銀行が買ひ取るに當りて、其資金をば日本銀行に仰ぎたるに、企業資金の需用が増加せる爲めに、日本銀行が結局兌換券を増發するに至つたからである。如何なる事情があらうとも、若し日本銀行が兌換券の増發を行はなかつたならば、物價は左程騰貴しなかつたであらう。此見地より論ずれば、我國の物價騰貴の原因は通貨の膨脹に在りと云ふことが出來ないでも無い。然しながら、自然の成行に任せたる現状を土臺として考ふれば、通貨の膨脹を以て我國に於ける物價騰貴の根本的原因と看做すことは不可能である。然らば、我國の物價騰貴の根本的原因は何であるかと云ふに、吾人は之を輸出の激増に求めねばならぬ。他國

は姑らく措き、歐洲開戦後に於ける我國の物價は通貨が先づ膨脹せる爲めに昇騰したのではなく、輸出が増加した結果として、物價が先づ多少騰貴し、物騰が騰貴せる爲めに通貨が次いで膨脹し、通貨が膨脹せる故に物價が更に昂騰したのである。此見解に基きて論ずれば、大藏大臣の物價論は幾多の矛盾せる意見を包含せるにも拘らず、大體に於て多數經濟學者及び操觚者の唱ふる説よりも寧ろ正確であると云はざるを得ぬ。

五 物價調節の方法

前述の如く我國に於ける物價騰貴の根本的原因は輸出の激増であつて、多數論者の信せるが如く通貨の膨脹では無いが、物價を人爲的に低落せしむる最上の方法は通貨の收縮に外ならぬ。何故となれば、通貨を收縮すればするに従ひ銀行は貸出に制限を加へ、銀行の貸出が減退

すれば、企業家の利用し得る資金が減少し、企業家の利用し得る資金が減少せば、貨物に對する需用が收縮するからである。大藏大臣は通貨をば現金通貨と信用通貨との二種に分ち、通貨を收縮するには現金通貨のみならず、信用通貨をも收縮するを要すと論じて居らるゝが、信用通貨は現金通貨をば土臺として流通するものであつて、前者は後者と略ぼ同一の率を以て伸縮するを常とするものであるが故に、現金通貨の流通額を減少せしむれば、信用通貨も同時に自ら收縮する結果として物價が必ず大藏大臣の所謂現金通貨の減額に比例して下落することに就きては何等の疑を容るゝ餘地が無い。

一般物價調節の第二の策としては輸出の制限を行ひ得る。内國品の輸出を制限することは取りも直さず其等の貨物に對する需用を減退せしむる所以である。尤も輸出の制限に依りて物價

を調節する場合には、總ての貨物の輸出に對して制限を加ふるか、或は同時に通貨の收縮を行はねばならぬ。若し通貨に對して何等の調節を行はずして、單に一部の貨物の輸出に對して制限又は禁止を加へなば、其等の貨物の市價は低落す可きも、他種の貨物の市價は却つて幾分か騰貴することに爲り、結局一般物價の平準は何等の變動を蒙らざることに爲るかも知れない。尤も輸出に制限を加ふれば、通貨は自然に收縮するの傾向を有す可きが故に、或は特に通貨の收縮を人爲的に行ふ必要が無からう。然しながら輸出の制限に依る物價調節をして無効のものたらざらしめんと欲すれば、通貨が他の原因に依りて膨脹することを豫防せねばならぬ。

此外、有効的なる物價調節策として頻りに提唱せられてゐるのは最高價格の制定である。總ての貨物に對して標準價格を公定するは不可能

ではあるが、食料品、織布及び其他の必要品の最高價格を定め、夫れ以上の價格を以て此等の貨物を賣買する者を嚴罰に處するの法令を公布して、眞面目に之を履行すれば、少くとも一時的には狹義の生活費を減退せしむるを得るは明かである。然しながら、此際に於ても通貨收縮を同時に行ふの必要あることを忘却してはならぬ。何故となれば、假りに通貨の收縮を行はずして、單に或種貨物の價格を公定すれば、其等の貨物の購買に費消せらる可かりし金額の一部分が他の貨物の購入に利用せらるゝ結果として此等の貨物に對する需用増加し、其市價は自然幾分か騰貴するに至り、結局廣き意味に於ける國民の生計費は少しも減少し無いことに爲る虞れがあるからである。

政府に於ては物價調節の一方法として貯蓄を奨励してゐるが、其の効果は疑はしい。貯蓄が

盛んになれば、消費財の需用が減退し、其市價は勿論幾分か低落するに相違無いが、貯蓄せられたる金子は貯蓄箱に死藏せらるゝのでは無く、貯蓄銀行又は郵便局に預入せらるゝを常とし、而して此預金は銀行又は大藏省に依りて諸種の事業に對して貸與せられ、斯く貸與せられたる資金は貨物の購入又は勞働者の雇傭の爲めに費消せらるゝものであるが故に、一旦低落した物價は再び騰貴するに至ることを看過してはならぬ。此貯蓄の奨励に依る物價調節策を有効的たらしめんと欲せば、矢張り貯蓄を奨励すると同時に通貨を收縮せねばならぬ。

英佛等に於ては物價の奔騰を防止する爲に暴利に對し峻嚴なる取締を加へんとしてゐるが、通貨の收縮を伴はざる暴利取締は不徹底なる物價調節策であると云はざるを得ぬ。商人が昨日十圓に仕入れたる貨物を今日三十圓に販賣し、

又は製造業者が五圓の生産費を以て製造したる物品を二十圓に賣るとすれば、或は夫れを暴利と看做すことが出来るであらう。然しながら、單に販賣價格が高きの故を以て、暴利を云々することは出来ない。縱令、賣價が五十圓であらうとも、仕入價格又は生産費が四十五六圓に達してゐるとすれば、之に對して何等制裁を加ふるの餘地が無い。而かも通貨が膨脹してゐる際には、總ての競争貨物の市價並に貨銀は其の膨脹の程度に應じて騰貴するものであるが故に、仕入價格も生産費も昂騰する結果として、貨物の賣價が高率に上つて居つても、其貨物の販賣者を罰することが出来なく爲る。

之を要するに、通貨收縮以外の各種物價調節策を有効的ならしむるには、矢張り通貨の收縮を行はねばならぬ。是れ予が上文に於て通貨の收縮を以て最上の物價調節策と稱した所以に外

ならぬのである。而して通貨を收縮する方法としては(一)日本銀行の金利を引上ぐること、(二)兌換券發行に對して累進税を課すること、(三)在外正貨をば兌換券の正貨準備より除外すること、(四)郵便貯金利子を引上げ、貯金の増加額をば政府に於て外國公債に投資すること、(五)租税を増徴して、之を財源として我國の外債を償還すること、(六)補助金の交付、利益の保證或は其他の方法に依りて海外投資を奨励すること、(七)政府の買上用品は出來得る限り外國より之を購入すること、(八)内地品の輸出を制限すること等を擧げ得る。尤も是等の手段は單に通貨を收縮するの目的を達するに有効なるものであつて、其の結果より判斷して必ずしも政府の採る可き政策であると云ふことを得ない。否な

果を呈するの虞れがある。然し之に關する評論を試みるは本稿の範圍外に屬するがら此處に於て擱筆する。

アダム・スミスの價值論

に就いて (四完)

加田 忠 臣

(十五)

デビッド・リカルドは財の價值は其生産に必要な勞働の相對量によりて決定せらるゝものとなし、アダム・スミスの價值説を批評して次の如く言へり。

“Adam Smith, who so accurately defined the original source of exchangeable value, and who was bound in consistency to maintain, that all things became more or less valuable in pro-